
SNS ～ 25年の奇跡～

都与田 こるさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SNS〜25年の奇跡〜

【Nコード】

N7569X

【作者名】

都与田 こるさ

【あらすじ】

青葉とフウマが中学2年生の時に出会い、同じ班だったことを機に両想いになるも青葉が転校したことでお互いの思いがうやむやに。25年後SNSにて奇跡的にバーチャルな再会を果たし、当時の思いをカミングアウトした結果お互い両想いだったことが判明。

その年の12月、フウマと青葉は出会った場所にて本当の再会をする。

2年後、フウマのバンドは大ブレイクし日本武道館にてコンサート
を敢行し青葉はフウマがとってくれた座席から見ながら涙を流して
みていた。

バーチャルな再会（前書き）

君と出会って別れたのは今から25年前中学2年生の時の1学期の3ヶ月間だけ。

当時、お互いを想い合っていたにもかかわらず、素直じゃなくて君を知らず知らずのうちに傷つけていたね。

君は今、スターダムにのし上がっている。

そして、私は君を後ろから応援している。

バーチャルな再会

海原青葉は10数年前に公務員の紀彦と職場結婚し2人の女の子に恵まれ、仕事で体を壊して今は主婦をしている。

SNSの「vox i」にはまりつつあり、学校のPTAにも積極的に参加していてまさにとても充実しているようなさみしいようなそんな日々を送っていた。

ある朝、「vox i」の「同級生」の名前を目にして青葉は電流が走ったようなドッキリ感に包まれた。

「中橋フウマ」

青葉にしてみれば25年前に同じクラスにいて、同じ班にいて変なウワサ立てられた相手でもあり、パンドラの箱を開ける感覚でページを除いてみた。

何これ？

東京でインディーズバンド組んでるって？

公式HPまで持つてるよ。。。。

マジで？スターダムに上がってる？

どつりで相手としては出会ったときから割に合わないって思った。フウマは応援団の副団長だったり、友達から聞いたではそのまま持ち上がった応援団長までなったんだもんね。

青葉は充実した私生活を送っているけど、ジミジミ主婦だし中学の

時だってそんないけているタイプでもなかった。

ま、普通が一番。

でも、とりあえず『青葉』って名前の人なんて存じあげません」
って玉砕すること覚悟してメッセージを送ってみた。

「こんにちは。

突然のメール失礼します。

同じ時期に同じ中学に通ってたことがあるみたいですね。vox i
同級生から訪問してきました。

私もたぶん同じ時期に同じ中学にいたと思われますので大変気にな
っていました。

よろしく願います。」

数分後、フウマから返事が来た。

「もし差し障りがなければフルネーム（旧姓）を教えて頂いてよろ
しいですか？」

フウマからの返事が大変うれしくて青葉はメールを返した。

「私は既に表示されていた名前で中橋くんのことに気付いてたんで
すが、昔の名前は『大島青葉』です。」

更にフウマから返事がきた。

「1年の時A組でした？」

即座に青葉はメールを返した。

「1年の時はD組、2年はG組。2学期の始業式の日に移校しまし
た。」

フウマからの返事は。。。。

「じゃあ二年で同じクラスになってる訳ですね・・

はいはい！！思い出しました！！大島さんだ！！こちらこそマイヴ
オクお願いできますか？」

転校してからというものの、よっぽど仲がよくないと覚えてもらえないもので、フウマが青葉のこと覚えていたこと感激して更に返す。

「喜んで！こちらこそマイヴオクよろしく願います。」

フウマからも、

「覚えていてくれて光栄です　こちらこそよろしくです」

青葉は父親の仕事の都合で中学校3校に渡っていた。

フウマと青葉が出会った2校目である南翔中にいたところが、学生生活が楽しかったから忘れるわけがない。

数時間後、フウマは仕事のためメールのレスが遅れた。

「ゴメン　工作中だったんでレス遅れちゃった。うん　なんかイロイロ思い出してきました」

青葉もまた、すぐに自分のことを思いだしてくれたこと、マイヴオクとして受け入れてくれたこと、とてもうれしく思い、お互い照れるような思い出もあったような気がする旨メールを返した。フウマは東京に出てきてから北海道にいる人間とは青葉と同じくよっぽど親しくもない限り連絡をとっていなかったらしい。

voxiではじわりじわりと自分の正体を明かしていくってことが、楽しみの一つ。

でも、フウマの返事が直球すぎて簡単に返すことになっちゃったためすごく意味なく思ったのもつかの間、フウマからメールが来た。

「俺。。。。大島さんになんか失礼なこと言った？」

言われた覚えは、宿泊学習の帰りのバスの中で「スケベ」だの「エロ」だの罵倒したことくらいだったのかもしれない。

あえてこのことは後日話すとして、

「な〜んも、失礼なことなんて言われてないよ。」

でも、お互いに思い出したくもない出来事（事件？）はあったかも

…。」

そんな、メールを返されたからフウマがとても気になるのは無理もない。

青葉は知らなくてもいいことを知ることになると前置きし、フウマが同じくvoxiをやっていたことを知らないで日記に登場させたことを教えた。

日記の内容の一部

「まさか2年連続で転校することになるとは。。。。

この学校にいたときはここの学校のマイヴオクさん数名のおかげで大変楽しかった。

宿泊研修のときの夜中好きな男の子の話とか、その男の子と私が両思いらしいことが判明し掃除当番のとき2人きりで理科室に閉じ込められ冷やかされたこともあったな（今でも忘れてないぞ）。。。

最後の挨拶は涙こそは流してないけど、ホントにつらかった。

クラスみんなからもらった寄せ書きの色紙、その色紙にバス停にてマイヴオクさんに書いてもらったメッセージは今でも宝物です。そして、私はクラスみんなのこと忘れてません。」

という文面をフウマがとうとう目にしてしまったのだ。

そう、当時、青葉の好きな男の子で掃除当番のときに一緒に理科室に閉じ込められた相手はフウマだったのだ。

どれだけ打ち明けたのに勇気がいったのだろうか。

でも、今の青葉には40にリーチのおばさんであるがゆえに子供の母親になっているからはじらいはない。むしろそんな言葉は宇宙の果てに飛んでいる。

呆れてくれて結構だ！

そんな覚悟でいたのだ。

数分後フウマからのメール。

「思い出だした（笑）てか、両想いだったの？ 完全な俺の片想いだと思つてたからそっちの方がビクリだ！」

青葉は南翔中に転校する前にいじめられた経験があり、異性に対し大変弱腰になっていたので、仲が良かった友達の影響でガサツでそっけない態度をとっていたことが災いし、フウマは片思いだったと思つていたらしい。

お互いに25年間モヤモヤしていたのは言うまでもないが、25年前既にお互いに両想いだったこと、このやりとりがきっかけで晴れ間が見え感激した。

フウマから公式ホームページのアドレスも教えてもらっていたが、既に青葉は見ていたうえ、インターネット限定のラジオ放送も聞いていたことを踏まえて「バンドのページはもう見たよん。ラジオの声を聞いててさすがに応援団の団長やってただけあつてはりがあるな」って思ったよ。」

フウマの声、25年前のままだよ。

フウマはとても照れくさかったらしく、インターネットとはいえラジオ放送の大変さというものを身に試みているようだった。

フウマのブログに「クラス会」の話があり「振った女」のことがでていた。

青葉はふと、

「私のことだったのかしら？」

と気にしつつ、ブログの材料に困ったら登場人物として協力することをメールを送信した。

フウマは3年前に綴ったブログだったため記憶には無かったということだが、青葉に証拠のアドレスを見せたら高校の頃の話だということを教えてくれた。

青葉にしてみればフウマに対しそんな振り方したおぼえはなく、うやむや感を残して転校しちゃったからこそ良い思い出でありつつホロ苦すぎるだから昔働いていた場所での飲み会での「初恋ネタ」として話すことが多い。そんな思いが強かった。

フウマからのメールで

「俺もあの時もうちよつとわかり易くアピールしてれば多少は違ってたかも（笑）」

中2じゃあ無理だよね（笑）」

フウマは誰にも打ち明けてなかったみたいだがフウマの想いを感じ取っていたクラスメートがいたのだ。

宿泊研修の時の夜、「中橋って青葉ちゃんに気があるんじゃない？なんかキヤラかぶっているもの」

そんなことを言った張本人がフウマと青葉を理科室に閉じ込めたのだ。そしてクラスの女子全員に知られちゃったのだが、たまたま、同窓会に出席した同じクラスにいた男子にこの話を打ち明けてみると「あ、そんなことあったね」ってそんな程度だったのだ。もちろん中学2年生だからなにもなかったと言えは当然だ。

青葉にとっては人生初の両想いだったと知るのに25年もかかって

しまった。

フウマも青葉も当時、冷やかされることには不慣れでお互いに「両想い」って認識してたらその後の人生観はかなり変わってたであろう。

当時、フウマは応援団の副団長もやっていいたうえ、翌年には応援団長までもすることになってしまったから冷やかされることが嫌なものなおさらだろう。

青葉は当時から安定志向だったが、フウマはきっとバンドマンはやってなくて同じく安定志向でいたんだろうか？
なにせ青葉がそっけなさすぎて「片想い」のままで終わったとフウマに思われている。

転校直後に1年時に特に仲の良かった友人（2年の時は青葉と違うクラスだった）と手紙や電話のやりとりをし、中2、高1、高2と会ってはいて、ときどきフウマのこと話題にあがったりしたのだったが、友人もまた相手も彼氏アリだったり振られたり複雑だったようだ。

青葉の離れてしまったあとで気づいた相手に対する想いの大きさを
感じる鈍さはこの時に始まったのかもしれない。

それとも、運命がそうさせたのだろうか？

青葉が同じく中学校を卒業したところ同じ想いをしたことがある。

その時のブログ。

「♪春はお別れの季節ですって歌の歌詞を入れてみた。。。。」

（知っている人はたぶん８０年代を知っているかも）
むかしむかし……っていつても中学校を卒業したての頃。
今更、気づいても遅いんでないの？なんて思いがこみ上げたことが
ありました。
結婚して１２年になるし、高校も卒業して２０年にもなるし、堂々
とぶっちゃけましょう。
中学３年の時の数学の授業のときのこと。
男子数名が私に

『大島！お前どこ当たるの？』

当時の学校は男女混合の出席番号。
数名のうち１人は私のすぐ後確定！
もちろん私、授業まじめに聞いてましたよ（苦笑）。
ってか、図形の証明以外は結構得意だったかもwwwwwwwwww。
でも、そんなやり取りは当時の私の楽しみでもありました。。。。

で、卒業したての頃に話が戻ります。
気がつけばそのグループの１人に淡い恋心を抱いていました。
（なおこの人はフウマではない）
とても性格のいい男だったと私は記憶しております。
ってか外見より中身重視なのです。私。

数カ月後、友達と中学校へ遊びに行ったはよかったのですが、その
人はいました。。。
でも。。。。。
話しかけられずあえなく撃沈。。。

。。。。さらに数年がたち
（就職２年目くらい？個人情報うるさくなかった頃）

その人の家族が仕事に関わってました。

住所を見たとき

え?????

聞いてみたら、その人だと判明!!

うれしい再会(？家族だから違うだろ!)ではありませんでした。

そして、転勤で親元を離れる前日。

その人のお母さんが気を利かせて、うちに電話をかけてくれました。
あれこれ、思い出話や職場の話、近況などで2時間も話まわりました。

当時、私は夫とはちがう人と付き合っていました。

だから素直に「中学時代、あなたが好きでした」とは言えなかった。

でも、結婚して10年以上たっているし中学時代の恋沙汰に寛大な
夫に感謝します。

もっと素直になればよかった。

その人も幸せな家庭を築いていることを心より祈っています。」「

と綴ったこともフウマには打ち明けている。

お互いのメールアドレスや携帯番号を交換し、この一連のやり取り
がそのうち毎日続くようになり、奇跡の再会のきっかけになるとは
思いもよらなかった。

バーチャルな再会（後書き）

海原（旧姓：大島）青葉のモデルは作者自身なのですが、「中橋フウマ」のモデルには2人います。1人は中学の時の私の同級生でバンドマンを現役でやっている人なのですが、内容はほとんど事実に近かったりします。1人は名前のモデルとしました。その子は昨年小児がんで9歳の生涯を閉じた長女の同級生の「フウマ」くん。「フウマ」という響きもすごくよくてどうしても登場人物の名前としても使いたかったのです。

この世で体験できないことせめて小説の世界で体験させてあげたかったというおせっかいな思いもありました。

青葉とフウマが25年の時を超えて再会したことは運命だったのかもしれませんね。

リアルなやりとり

フウマが青葉にメアドを覚えてくれた翌日、携帯にメールを送ってみた。

「オハヨー（〇・ー・〇）ノ。

旧姓：大島です。とりあえずメール送りました。

携帯番号もお知らせしますね。」

すぐにフウマからメールの返信があつた。

「おはようです。ありがとです直メの方が楽かなと思ってね。」

青葉としては本音語ると実は家族の目もあり気が楽ではなかった。

ちようど運悪く青葉は家に誰もいないことやPTAもないことをいいことにひとりカラオケに行っていたことをメールで返信した。

そんな話題でお互いメールのやり取りをしていると、だんだんと宿泊研修の思い出話に花が咲いていた。

宿泊学習の帰りのバスで青葉とフウマとその他男子数名とバカ騒ぎをしたことやそんな中「スケベ」だの「エロ」だの罵倒されたことを打ち明けてみた。そのグループの中で女の子は青葉一人だったので仕方がないといえはそこまで。

フウマからのメールで「その攻撃してた側には俺もいたの？」

は？とぼけてくれちゃって何言ってるの？って返信してやろうかと思っていたもののそこは大人の対応返信した。

「はい、主犯格でございます（爆）」

フウマがとてもびっくりしていたようで、

「え〜！！マジで（ - ω - ）」

とうとう青葉は

「もう、エロだのスケベだの言ってくれっちゃったりして！！！
そうそう、私がポニーテールにして学校にきた日に私がすごいがさ
つな行動していたの覚えてる？」

そのころの初夏の制服が冬服から夏服に変わったあたりちょうど、
青葉の髪が肩についてもそのままにしても校則にひっかかるよ
うな長さではなかったが、やっとポニーテール出来るようになった
のだ。

フウマは自身の青葉のしてきた髪形が片方しぼりであれポニーテ
ールであれ「ツボ」であり照れ隠しであることを詫びた。

（どちらかといえば片方しぼりのほうが好みだったらしい）

青葉は南翔中学校に最後に登校した日、慣れた髪型でもあったので、
夏休みいっぱいしていた前髪ちょっと残して上に縛って髪型にして
きた。

プールへ行ったときだけはポニーテールにもしていたのだけれど。
フウマには青葉が最後に登校した日の髪型が大変印象が強かったよ
うだ。

青葉が行った先の学校もこれまた校則が厳しくてくじけてそして、
翌春、南翔中に来る前の学校にいたいじめっこグループの一人が同
じ学校に転校してきた上、3年生に進級してから2週間たってクラ
ス替えとなり同じクラスになったので何度、南翔中に帰りたくなっ
たかわからない。

ただ、青葉にとって楽しみは塾通いだった。

校則の厳しさはなぜか進学先まで続いていたのだが、青葉はどちら
も制服に手を出していた。

翌日フウマから「電話かけていい？」と青葉の携帯電話にメールが
入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7569x/>

SNS～25年の奇跡～

2011年11月12日20時17分発行